
デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

ゼクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

【Nコード】

N1367Z

【作者名】

ゼクセル

【あらすじ】

ある事件で1人になった闇斗。そこへ黒いデジヴァイスが降ってきた。そして、闇斗はそこから新しい人生がはじまるのだった。これは原作にオリジナルを積極的に入れていく小説なので話の内容がガタガタになるかもしれないのでそこはご了承ください。

プロローグ（前書き）

デジモンアドベンチャーの小説初投稿です。よろしくお願いします。

プロローグ

1995年のある日、突然俺は1人になってしまった。原因はさっきのオレンジ色の恐竜と緑色の怪鳥との激突。奴らの戦いで近くにあった俺の家がオレンジ色の恐竜に潰されてしまった。両親の安否を確認するため家へと向かった。がれきの下から父と母らしき手がそれぞれ1つずつでていたので引っぱった。しかし、出てきたのは父と母の腕だけだった。そのとき、俺の父と母が死んだのを悟った。俺はその事実に号泣した。

あの事件の次の日、だから俺はこうして1人さまよっていた。どこにも行くあてがないから。親戚は「金がない」だの「部屋がない」だの建て前の理由を言って俺を追い返した。他の家も同じだった。さまよっているうちに人間の汚さやあのオレンジ色の恐竜への恨みや憎しみがこみ上がってきた。

「絶対に復讐してやる！」

そう言ったら、空から何か降ってきた。幸い周りには人がいなかった。降ってきたものを拾い上げてみる。それは黒いポケベルみたいで真ん中には画面が付いていた。そして、それは突然黒く輝き出し俺は空へと吸い込まれていった。そこで、俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

新参者なのでいろいろ意見をくれるとありがたいです。

主人公紹介（前書き）

闇斗のプロファイルです。

主人公紹介

あんざき
暗崎 闇斗 やみと

身長 126cm

体重 28kg

年齢 7歳

誕生日 8月10日

性別 男

性格 群れるのが嫌い

冷静

無口

孤独が好き

好きなもの

・蕎麦

・サバイバル

・バナナ

嫌いなもの

・甘いもの

・苦いもの

・甘ったれる奴

・命を大事にしない者

今作の主人公。我が道を行く1匹狼。3歳のデジモン事件以降心に負の感情をいだくようになる。それがきっかけで「闇の選ばれし子

供」に選ばれてデジタルワールドに行く。デジタルワールドに行つてからは闇の力を使役することができる。自分が「闇」であることを誇りとしているが命を大事にしない者を味方とは思わない。利用できる者は最大限に利用しようとする。そして闇斗のデジヴァイス限定の能力がいくつかある。

主人公紹介（後書き）

闇斗のデジヴァイスの能力はネタバレになるのでまだ言えません。

ダークネス進化（前書き）

話がガタガタです。すみません。

ダークネス進化

side 闇斗

……俺を誰かが呼んでいる。誰だろう？俺は目を開けてみた。すると、変な生き物がこつちをみて、呼んでくる。ああ、夢か……。そうおもい、俺はまた目を閉じた。

ガブッ

俺が目を開けるとその変な生き物は耳をかんできた。

「いつてえええ！？」

俺はいきなりきた痛みに驚いて跳ね起きた。

「痛えな。何するんだよお前。」

？「だってまたねようとしてたもん。」

「そこは悪かった。さっきから俺を呼んでっけど何の用だ？」

変な生き物にまたねようとしたことを謝ってなんで俺を呼んでたのか聞いた。

？「まず自己紹介だね。ぼくはコロモン。ぼくは君を待ってたんだ。」

「俺…を？なんで？」コロモンという生き物がそうやってきたのでなぜか聞いた。

コロモン「その黒いデジヴァイスを持つ子がくるのを待っていたん

だ。ぼくはそのパートナーデジモンだから。」

…いま分らないことだらけだったぞ。

「待て、デジヴァイスとかデジモンってなんだ？」

俺はそうきいてみた。

（１０分後）

「なるほど、お前らはデジタルモンスター通称デジモンと言われる生き物でデジヴァイスはこの世界で大切なものなんだな。それを守るのがパートナーデジモンと言われるデジモンなんだな。」

約１０分間の説明でだいたい納得できた。…え？なぜそんなにすんなりと納得できたか？最近は大変なことづくしだからな。これくらいありじゃねと思ったから。

「説明ありがとよ。じゃーな。」

俺は後ろを振り向いて歩いてこうとした。

コロモン「えええ！？どうして？」

「俺には守りなんざ必要ない。１人で好きにやるのが１番なんだよ。」

そう言っ立ち去ろうとしたら、

ギイヤアアア

その声とともに赤い恐竜がきた。

「な、なんだ！？あれは！？」

コロモン「ティラノモンだ！」

ティラノモンは俺に突進してきた。

「くっ…」

突進をかるうじてかわすもティラノモンはすぐに振り向いて炎を吐いてきた。これには反応できず死ぬ覚悟をした。しかし、俺は死ななかった。なぜならその炎をかわりにあいつが受けてくれたからだ。

「お前！？…どうして、どうして俺の身代わりなんか…」

コロモン「だって守らなくちゃいけないもん。だからだ…よ。」

俺が聞くとあいつは弱々しく答えた。ティラノモンはまた突進をしてきた。そのとき、俺の心が「ティラノモンに向かって手をかざせ」と言ってきた気がした。その通りに、俺は突進してくるティラノモンに手をかざす。すると、漆黒なオーラが出てきて、ティラノモンの突進を止めた。

「おい、お前。どういった理由か知らんが俺のパートナーデジモンに手をだしたのは許さねえ。」

その言葉でティラノモンを威圧し、漆黒のオーラで後ろに倒した。

「コロモン、いくぞ。さっき言っていた進化だ。」

俺がそう言つとコロモンは黒い光に包まれた。

コロモン　　ダークネス進化！……………ブラックアグモン！

コロモンがブラックアグモンに進化した。しかし、明らかに体のサイズが違った。ブラックアグモンじゃ勝てないと思った。

「ブラックアグモン！俺がやるから退け！」

俺がそう言うが

ブラック「大丈夫だよ。そこで見てて。」

ブラックアグモンがティラノモンに向かっていった。すると、ブラックアグモンはその体から想像できないほどのスピードでティラノモンを圧倒する。そして、

ブラック「ベビーフレイム」

ブラックアグモンが黒い小さな火の玉を吐いた。ティラノモンは有り得ないくらいに吹き飛んだ。そして、ボロボロになって逃げた。

「…凄いな、ブラックアグモン。」

ブラック「名前長いからブラックでいいよ。」

「そうか。」

そんな会話をしてるとある疑問が浮かんだ。

「それにしてもなんであんなに体のサイズが違ったのかてんだ？」

「それはお前の持つ闇の力とブラックデジヴァイスによるものだ。」

俺が疑問をもらすとそれに答えるようにヴァンパイアみたいなデジモンが突然現れた。

ダークネス進化（後書き）

ダークネス進化は普通の進化との相違点がいくつもあります。意見、感想お待ちしています。

ヴァンデモン（前書き）

今回は説明だけです。ストーリーは全く進みません。

ヴァンデモン

突然姿を現れたヴァンパイアみたいなデジモン。

「なんだ？お前は？」

？「私の名はヴァンデモン。君と同じ闇を愛する者だ。」

俺が聞くとヴァンデモンと言われるデジモンはそう言った。

ブラック「ヴァンデモン！？確か最近力を上げている」「ナイトメアソルジャーズ」のリーダーだよ。なんでこんな所に？」

ブラックがヴァンデモンについて説明した。だが、いまいち納得いかないところがあるなあ。

「そういえばさっき「闇の力」とか「ブラックデジヴァイス」とか言ってたけど全く意味が分からないが…」

ヴァンデモン「教えてやってもいいが1つ条件がある。」

ヴァンデモンは俺が質問するとそう切り返してきた。

「…なんだ？」

ヴァンデモン「私の仲間になれ。」

俺が聞いたらヴァンデモンは仲間になれと言ってきた。

「……じゃあまず俺の質問に答えてもらう。仲間になる件はその後だ。」

俺は仲間になるつもりはないがいろいろ情報を聞けるかもしれないということであんな風に言った。

ヴァンデモン「……いいだろう。まずは何から聞きたい？」

するとヴァンデモンは俺の要求に応じてくれた。

「まずは闇の力についてだ。闇の力にはどういう能力があり、使用者にどんな効果を与える？」

ヴァンデモン「闇の力にはいろいろな能力がある。例えば、先ほど貴様がティラノモンに使ったように盾にしたり、相手に球状にしてぶつけることができる。そして、使用者に与えられる能力についてだが知力、体力などの上昇だ。だから貴様は3歳にも関わらず大人っぽいしゃべり方や難しい言葉が分かるのだよ。」

なるほどな。だからこんなに流暢にしゃべれるのか。さっきのティラノモンの件についても納得がいくな。

「じゃあ次はブラックデジヴァイスについてだ。」

ヴァンデモン「ブラックデジヴァイスは普通の神聖なるものとちがって暗黒なものだ。闇に反応し、闇と共鳴することで普通の進化と異なる進化「ダークネス進化」ができる。ダークネス進化で進化したデジモンは必ずウイルス種になり、通常とは違う異質な能力も備わるようになる。貴様のパートナーデジモンのブラックアグモンで

いえば高速移動のことだ。弱い成熟期のデジモンなら簡単に倒せるだろうな。」

これも納得がいくな。ブラックがティラノモンのときにみせた高速移動についても成長期にも関わらず成熟期を倒したことも理解できた。ヴァンデモンの情報は信憑性があるな。

「もう一つ聞く。お前の組織は何のためにある？」

ヴァンデモン「私の組織は光と闇が混ざり合った世界を作り出すためというんなものへの復讐だ。」

「その中に人間は？」

ヴァンデモン「もちろん入っている。」

利害が一致するな。これを利用しない手はないな。

「いいだろう。仲間としてではなく手を組むだけだ。そこを間違えるなよ。」

ヴァンデモン「そのパートナーデジモンは？」

ブラック「僕は闇斗にどこへでもついていくよ。」

ヴァンデモン「よかるう。では私の城へ行く。ついてこい。」

城とか持ってるのかよ。ヴァンデモンの城へ向かう俺とブラックだった。

ヴァンデモン（後書き）

意見、感想お待ちしております。

交渉（前書き）

すみません。話がガタガタかもしれません。

交渉

俺らはヴァンデモンについていき、城にたどり着いた。

「随分と趣味の悪い城だな。」

ヴァンデモン「よくそれを城の主人の前で言えるな。まあ、中に入るといい。」

ヴァンデモンはその後城の正門を開け、俺らの中へ入れてくれた。中も想像通り趣味が悪い。まあ、言わなかったが。

？「ヴ、ヴァンデモン様！そ、それは人間ではありませんか！？い、入れていいのですか？」

ヴァンデモン「そいつは闇の紋章の選ばれし子供だ。バケモン共部屋を案内してやれ。」

バケモン「そ、そのかたが…分かりました。では闇の紋章の選ばれし子供様。部屋を案内します。」

「俺はそんな長い名前じゃねー。闇斗つつ名前があるんだよ。」
バケモン「すみません。闇斗様。部屋へ案内します。」

この後バケモン達案内で自分の部屋についた。中は少し薄暗いが城の中よりまだマシだった。俺はすぐに床に転がり込んだ。久しぶりに安心して休めると思ったからだ。まあ、絶対に安心とはいえない気がするが。

ブラック「なあ、闇斗。」

闇斗「ん、どうした？ブラック。」

ブラック「あのさ……」

ブラックが俺に何か言いかけたとき、

ヴァンデモン「闇斗。交渉の内容確認だ。」

闇斗「わかった。わりいブラック。また後でな。」

俺はヴァンデモンによばれついていった。ついていくと「尋問室」と書かれた部屋についた。…え？尋問される？

ヴァンデモン「別に尋問はしない。内容確認だけだ。」

うお！？お前人の心読めるのか？

ヴァンデモン「顔にでていたぞ。」

…マジ？俺そんなに分かりやすい？

ヴァンデモン「内容確認だ。私達の仲間になる条件としては「人間への復讐」、「闇の紋章の探索」これでよいか？」

「待て。闇の紋章ってなんだ？」

ヴァンデモン「闇の紋章とはダークネス進化の補助道具だ。これがあれば成熟期以上にも進化が可能になる。あと、貴様の闇の力を制

御しやすいなる。」

なるほど。理解した。でも、条件が少ないなあ。あともう1つくらい……そうだ！

「ヴァンデモン、話を戻すが交渉の条件にもう1つ付け加えてほしいことがあるんだが。」

ヴァンデモン「なんだ？」

「俺をリーダーにした特別部隊をつくること。つくったらそちらの依頼も引き受けよう。どうだ？」

俺の付け加える交渉内容についてヴァンデモンは考えた。その結果、ヴァンデモン「いいだろう。人員もそちらで選ばせてやる。」

ほっ。なんとか成功した。

ヴァンデモン「では交渉内容はこれでよいか？」

「ああ。」

俺は交渉を承諾して自分の部屋に戻った。ブラックが床で寝ていた。しかし、扉を開ける音で起きてしまった。

「あ、すまん。」

ブラック「別にいいよ。」

「そついえばさっきなにを聞こうとしていたんだ？」

俺はさっきなにを聞いたかったかブラックに訪ねた。

ブラック「あのさ…僕邪魔なんだよね？」

「…は？なんで？」

ブラック「だって、闇斗僕と会ったとき俺は1人でいいて言ってたじゃん。」

ああ、まだあれ気にしていたのか。別にもう気にしなくていいのに。

「最初はそう考えていたけど、あのときにお前がいなかったら、俺は死んでいた。守ってくれた奴を嫌う理由なんてどこにもないぜ。ましてやこの世界はわからないことだらけだ。また死んでしまう状況になるかもしれない。だから、俺のパートナーデジモンになってくれないか。俺はそのほうが助かる。」

ブラック「だ〜から、闇斗のパートナーデジモンなんだって僕。これからもよろしく。」

ブラックがそう言うと俺らはお互いの手を握りあった。こうして、俺らの旅は始まるのだった。

交渉（後書き）

闇斗がなぜあのような交渉内容を提示したのか、後の話で明らかになります。

原作開始（前書き）

なんかプロローグみたいになってしまった。

原作開始

Side闇斗

よお！俺の名前は暗崎闇斗。俺はデジモン事件の次の日にふらつき歩いていると空からブラックデジヴァイスが降ってきた。それを拾うと気がついたら、デジタルワールドに飛ばされていた。そして、俺はそこでブラックアグモンのことブラックとヴァンデモンと会い、ヴァンデモンの城へ住むこととなった。さあ、ここで俺の仲間と叫べるデジモンを紹介しよう。

まずは俺のパートナーデジモンで素早い動きが得意。ダークネス進化で成熟期のブラックグレイモンまで進化が可能。いざとなると頼れる存在。ブラックアグモンのことブラック。

常に冷静沈着。身軽な動きで敵を翻弄する。チームではお姉さんの存在。猫型デジモンテイルモン。

相手の心が読むことができる。特技は超能力。魔神型デジモンウィザーモン。

相方のパンプモンととても仲良し。岩男みたいなデジモンゴツモン。ゴツモンの相方。「トリックオアトリート」という言葉が一番似合うデジモンパンプモン。

この5匹とリーダーである俺と合わせて 俺の部隊は成り立っている。体は子供、頭脳は大人。その名も…

ブラック「なに1人でブツブツ言ってるの？」

「驚かすなよ。びっくりしたじゃねーか。」

ブラック「なんかヴァンデモンが呼んでたよ。」

「何？あいつが？」

最近滅多に呼ばれることがなかったのになあ。だるいけど仕方ない。行くか。

ブラック「あ、それと全員でくるなって言ってた。僕と闇斗だけでこいだって。」

はあ！？なぜに？いつも全員で行くのに？なんか嫌な予感がしてきたなあ。まあ、行ってみるか。

というわけでヴァンデモンの部屋にきたんだが肝心のヴァンデモンがいない。全く呼び出しておいてなんなんだよ。

ヴァンデモン「来たか。闇斗にブラックよ。」

「で、何だよ。なんか俺らだけでやらなければならぬ用なんだろう

「？」

ヴァンデモン「流石だな。鋭いぞ。では、用件を言っぞ。よく聞いておれ。」

つたく。なんなんだよホント。早く言えよ。

ヴァンデモン「お前たちには人間界に行ってもらっぞ。」

「……………はあ？」

そのときに俺の運命の歯車が動き出した。

原作開始（後書き）

次回はいろいろ説明の回だと思っています。

人間界へ（前書き）

短いです。すみません。

人間界へ

前回のあらすじ
突然の辞令。

S i d e 闇斗

い、今こいつなんて言った？に、人間界に行けとか言わなかったか。いや、聞き間違いかもしれん。もう1回聞こう。

「い、今なんつった？」

ヴァンデモン「聞こえなかったか？人間界に行ってもらったと言ったのだ。」

……間違いないようだな。しかし、なぜ俺らだけ？人間界を攻めるならいつきに攻めたほうがいいだろう。

ブラック「どうして僕らだけ？」

まさしく俺がしようとした質問だな。でも、本当になんで？

ヴァンデモン「なぜなら……選ばれし子供たちが現れたからだ。」

え？選ばれし子供たち？確か…俺と反対の神聖なデジヴァイスを持った子供たちか。

「じゃあ、俺が潰しにいけばいいじゃねーか。」

ヴァンデモン「いや、お前たちは先に人間界に行って調査してもらいたい。」

「調査？なんの調査だ？」

ヴァンデモン「選ばれし子供8人目の調査だ。」

……はあ？さっき選ばれし子供たちが現れたって言ってたじゃねーか。

「8人目？どういうことだ？説明しろ。」

ヴァンデモン「まず選ばれし子供は全員で8人目いるのだが今デジタルワールドに来ている子供たちは7人だ。つまり、あと1人が人間界にいるはずだ。そこでお前たちにはその8人目の調査、デジタルワールドと人間界をつなぐデジタルゲートの設置を頼みたい。よいか？」

なるほど。つまり、俺らで8人目を殺してこいってことだな。まわりくどくそう言えればいいのに。

ブラック「ちよつと待ってよ。僕らは人間界行くんだよね。デジタルゲートがつながっていないのにどうやって行くのさ？」

あ、ホントだ。気づかなかった。

ヴァンデモン「つながっているんだが、こちらから一方的にだと2人しか通れないのだ。人間界からもデジタルゲートを開かないといけないんだ。」

へえ。そうなんだ。だから、俺らだけで行けってことか…。納得。

「じゃあ、ヴァンデモン。俺の仲間を頼んだぞ。もし、殺したりしたら……てめえを殺すから。」

ヴァンデモン「……………いいだろう。それでは準備はいいか？」

ブラック「いいよ。」

人間界か…。行きたくないけどなあ…。

「大丈夫だ。」

ヴァンデモン「それでは行ってくるん…ってもう入ってるし！」

俺らはデジタルゲートに入っていった。気がついたら、誰もいない路地裏にいた。

人間界へ（後書き）

次回は光ヶ丘のお台場探索の回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367z/>

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

2011年12月19日21時48分発行